Johnson & Johnson
FAMILY OF COMPANIES IN JAPAN

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会
Johnson & Johnson Contributions Committee

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会は、「ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社」、
「ヤンセンファーマ株式会社」の有志メンバーで運営されています

〒101-0065　東京都千代田区西神田３丁目５番２号
TEL：03-4411-6720　FAX：03-4411-6794
http://www.jnj.co.jp

Johnson & Johnson
FAMILY OF COMPANIES IN JAPAN

ジョンソン・エンド・ジョンソン

社会貢献レポート2014

©Johnson & Johnson K K.2015

いつの時代も変わらない信念を胸に刻んで。

ジョンソン・エンド・ジョンソンの三代目社長、
ロバート・ウッド・ジョンソンJr.によって1943年に起草された「我が信条（Our Credo）」。
英語による原文は、たった1枚の文書ですが、
以来、それは世界中に広がるジョンソン・エンド・ジョンソンのすべての企業活動の拠り所となってきました。
そして、「我が信条（Our Credo）」に記された第三の責任「地域社会に対する責任」を果たすため、
ジョンソン・エンド・ジョンソンでは、さまざまな社会貢献活動に取り組んでいます。
社会的責任という概念は、企業にとっていまや常識となっていますが、
ジョンソン・エンド・ジョンソンでは70年以上も前から、
それを変わらぬ行動規範として胸に刻み、これからも地域社会とともに歩んでいきたいと考えています。

我が信条

我々の第一の責任は、我々の製品およびサービスを使用してくれる医師、看護師、患者、そして母親、父親をはじめとする、すべての顧客に対するものであると確信する。顧客一人一人のニーズに応えるにあたり、我々の行なうすべての活動は質的に高い水準のものでなければならない。適正な価格を維持するため、我々は常に製品原価を引き下げる努力をしなければならない。顧客からの注文には、迅速、かつ正確に応えなければならない。我々の取引先には、適正な利益をあげる機会を提供しなければならない。

我々の第二の責任は全社員 ――世界中で共に働く男性も女性も―― に対するものである。社員一人一人は個人として尊重され、その尊厳と価値が認められなければならない。社員は安心して仕事に従事できなければならない。待遇は公正かつ適切でなければならず、働く環境は清潔で、整理整頓され、かつ安全でなければならない。社員が家族に対する責任を十分果たすことができるよう、配慮しなければならない。社員の提案、苦情が自由にできる環境でなければならない。能力ある人々には、雇用、能力開発および昇進の機会が平等に与えられなければならない。我々は有能な管理者を任命しなければならない。そして、その行動は公正、かつ道義にかなったものでなければならない。

我々の第三の責任は、我々が生活し、働いている地域社会、更には全世界の共同社会に対するものである。我々は良き市民として、有益な社会事業および福祉に貢献し、適切な租税を負担しなければならない。我々は社会の発展、健康の増進、教育の改善に寄与する活動に参画しなければならない。我々が使用する施設を常に良好な状態に保ち、環境と資源の保護に努めなければならない。

我々の第四の、そして最後の責任は、会社の株主に対するものである。事業は健全な利益を生まなければならない。我々は新しい考えを試みなければならない。研究開発は継続され、革新的な企画は開発され、失敗は償わなければならない。新しい設備を購入し、新しい施設を整備し、新しい製品を市場に導入しなければならない。逆境の時に備えて蓄積を行なわなければならない。これらすべての原則が実行されてはじめて、株主は正当な報酬を享受することができるものと確信する。

Johnson & Johnson

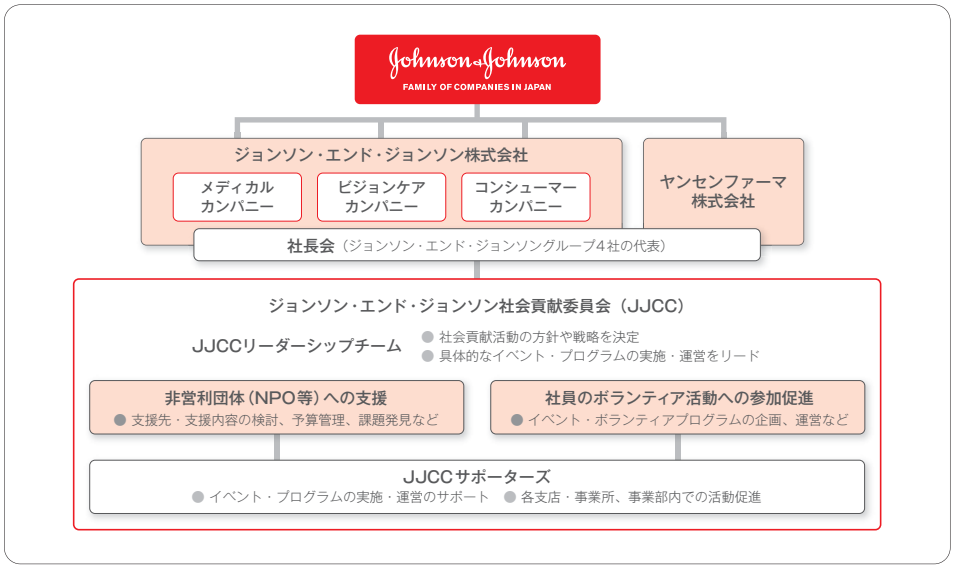
「我が信条（Our Credo）」に記された「第三の責任」には、いまへとつながる社会貢献への思いが込められています。

世界最大のトータルヘルスケアカンパニーとして負うべき責任

ジョンソン・エンド・ジョンソンの製品やサービスは、毎日世界中で10億人以上もの人々にご利用いただいています。そんなトータルヘルスケアカンパニーであればこそ、ジョンソン・エンド・ジョンソンは、世界中の人々の健康に非常に大きな責任を負っていると考えています。ジョンソン・エンド・ジョンソンはこの責任を全うするため、「我が信条（Our Credo）」の理念にもとづき、ビジネスを実践し、社会貢献を通じて地域社会に対する責任を果たせるよう努めています。

地域社会に対する責任を果たすために「いま」できること

日本のジョンソン・エンド・ジョンソングループでは、「我が信条（Our Credo）」の第三の責任「地域社会に対する責任」を果たすため、「ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会（以下、JJCC）」を結成しています。JJCCは、グループ各社の社員で参加の意志を示した社員ボランティアによって運営されています。そして、地域に密着したパートナーとの協働で、からだやこころ、社会の健康をテーマとしたさまざまな支援への取り組みを実践しています。



社会貢献レポート 2014
Contents

03 JJCC Report
障がいのある子どもたちに、最高の夏の思い出を。
07 JJCC Interview
ボランティアは、もっとカジュアルでいい。
09 ジョンソン・エンド・ジョンソンの支援領域
11 子どもへの支援
13 女性への支援
15 東日本大震災復興支援
17 その他の支援
19 社員によるボランティア活動
22 ヘルシー・ソサエティ賞
23 ワールドワイドに展開される社会貢献
25 グループ各社代表によるあいさつ

©Johnson & Johnson K K.2015

Our Volunteer Support Story

延べ700名以上もの手足が不自由な子どもたちと過ごした夏

障がいのある子どもたちに、最高の夏の思い出を。

ヤンセンファーマ(株)
岡村　峻

**学生時代から手足の不自由な子どもたちのキャンプをサポートしてきた岡村峻。
なぜ、13年もの長きにわたり、仕事をしながらボランティア活動を継続することができたのでしょう。
彼の活動を支えてきたものとは。そして、そこにある思いとは。**

満たされない思いでいた学生時代。そんな中で出会った学生ボランティアの募集広告がはじまりだった。

「学生ボランティア募集! 5泊6日、山中湖で自然を満喫!無料!」…。年の瀬も押し迫った12月、講義の合間に図書室で新聞をめくる岡村の目に飛び込んできたのは、「手足の不自由な子どものキャンプ」に参加する学生ボランティアの募集広告だった。
募集していたのは、「社会福祉法人日本肢体不自由児協会」。生まれつき、または出産時の障がい、あるいは幼い時の病気や事故などによって、手や足、背骨などの運動機能に不自由がある子どもたちとその家族を支援し、社会を啓発し、子どもたちが最も恵まれた環境にいられるようさまざまな事業を行っている団体である。
当時の岡村は、大学で福祉システム工学部の学生として、からだの筋肉の動きを補助するサポートロボットなどについて学んでいた。しかし、講義を受けていてもそれが何にどう生かせるかという明確なイメージを描けずにいた。「実際に人と触れ合ってみて、これが本当に必要なことなのか、身をもって経験したいというのが、そもそもこのボランティアに参加するきっかけでした」と岡村は当時を振り返る。本当の意味で学生生活が充実していたら、この記事に目を留めていなかったかもしれないのだ。
一方で、「場所は、東京YMCAの山中湖センター。キャンプが好きだったので、ちょっとこれ、得したかもっていう気持ちも強かったですけどね(笑)」と学生らしい正直な当時の胸の内を明かす。

打ちのめされた傷心の1年目から一転。トイレランキング第1位という結果に込められた子どもたちの「信頼」。

そんな学生特有の甘い考えにのぼせていた岡村の思いは、厳しい現実の前に完全に打ちのめされることになる。はじめは、「多少戸惑うことはあっても、自分なら何とかできるだろう」と高をくくっていた。
しかし、実際には現場に行っても、何もできない自分がいたのだ。きびきびと作業をこなし、子どもたちの世話をする先輩ボランティアの姿が大きく見える。さらに追い打ちをかけたのは、子どもたちの評価だ。子どもたちは、正直である。手助けしてくれそうなお兄さんやお姉さんをみんな慕ってくる。当然、何もできない岡村の周りには子どもたちがいない。「誰も話しかけてくれず、何もできずに5泊6日、ただただ寝食を共にしたというだけでしたね」。キャンプが終わった直後は、「もう二度とボランティアなんてやるもんか」と思ったという。
そんな岡村の気持ちをつなぎとめるきっかけとなったのが、学生ボランティアと子どもたちが再び会する「振り返りの会」でのある子どものひと言だった。キャンプ中は、子どもたちはボランティアスタッフを、敬称をつけないキャンプネームで呼ぶ。「くりりん」「チャルメラ」「ポンタ」など、学生ボランティアは子どもたちが覚えやすそうなキャンプネームを自分で考えてつけるのだ。
「私のキャンプネームは『ヘレン』でしたが、どうせ誰も憶えていないだろうと思っていました。すると振り返りの会で、ある子どもが、『ヘレン、おトイレ』と話しかけてきてくれたんです」。名前を憶えていてくれたこと、自分を仲間として受け入れてくれていたこと。その時の感動は、岡村に新たな、そしてさらに高いモチベーションをもたらした。翌年のキャンプ。そこには、前年とは打って変わって、子どもたちと積極的に触れ合う岡村の姿があった。学生ボランティアの間には、「キャンプ中、子どもたちからトイレをお願いされた回数」を競う「トイレランキング」というものがある。それは、ある意味で子どもたちからの「信頼の証」といってもいいだろう。その年、岡村はトイレランキングの第1位に輝いた。

上：初めてキャンプに参加した夏の岡村。座り込む姿に何となく生気がない。
下：翌年夏の岡村。はじける笑顔に自信があふれている。

手足の不自由な子どもたちも、のびのびキャンプ！

東京YMCA 山中湖センター

「手足の不自由な子どものキャンプ」に利用される東京YMCA山中湖センターは、1923年に開設された日本で最初の野外教育のための施設。フラットな地形を生かすことでできるだけ段差をなくし、トイレや浴室など各所に手すりを設けるなどユニバーサルデザインによる設計が施されている。

©Johnson & Johnson K K.2015

Our Volunteer Support Story

できるだけ多くの子どもたちをキャンプへ。キャンプの企画から研修、実施にいたるまで、運営スタッフとして活動する現在。

初めて「手足の不自由な子どものキャンプ」に参加してから13年。岡村は現在も運営スタッフとしてこのボランティア活動に関わっている。キャンプの企画から実施までを簡単に説明すると、1~2月にその年の研修日程およびカリキュラムを決定し、2~3月に学生ボランティアの募集計画を立案、3~4月に募集と面接、さらに5~8月の3カ月間で研修を行い、キャンプ当日を迎える、という流れになる。
その中で最も神経を使うのが、学生ボランティアの募集だという。キャンプは、約90名の学生ボランティアおよび運営スタッフ、約60名の子どもたち、合わせて約150名の規模で実施される。キャンプでは子どもたちのケアに万全の備えと対応が求められるので、どうしても適切なスタッフ数を確保する必要があるのだ。
募集告知は、新聞への広告掲載（岡村自身はこれがきっかけとなった）をはじめ、チラシ、ホームページ、フェイスブックといったソーシャルネットワークなど、「できる限り多くの子どもたちを参加させてあげたい」との思いで広く展開している。しかし、募集に一番有効なのは「口コミ」なのだという。看護学校や医学部の学生、一般学生などさまざまだが、その多くが先輩などから“熱い思い”を受け継いで応募してくる。それだけに参加希望者のモチベーションは全体的に高い。
また、3カ月にわたる研修は、運営スタッフによる「リーダー研修」および「現地トレーニング」で構成されている。ここで学生ボランティアたちは、片マヒ・四肢マヒの医学理解や障がいの症状などの知識とともに、車いすの座らせ方、衣類の着脱介助、食事介助、排せつ介助などを習得し、子どもたちの症状に合わせた対応をひと通り学ぶ。さらにレクリエーションの進め方では、体操のお兄さん顔負けの笑顔も習得しなければならない。
このような過程を経て、ようやくこのキャンプに関わるすべての人の“思い”が結実するのだ。その甲斐あって、いまでは参加を希望する子どもたちも年々増加している。

子どもたちの嬉しい変化に支えられて、これまでも、これからも。自然体のボランティア活動は続く。

ここ数年、岡村は学生ボランティアに対して、「人への興味の希薄さ」という危惧を感じるという。例えば、手足の不自由な子どもたちは、本人が尿意をもよおしてから出てしまうまでの時間が短いことがある。この場合、大切なのは子どもたちの表情を見ながら、的確にトイレを促す声掛けをすることだ。それが行き届かないことで、お漏らしをしてしまったら、その子どもにとって楽しいはずのキャンプが悲しい思い出になってしまう。「子どもたちをお預かりしている以上は、ちゃんと思い出を提供する責任がある。学生ボランティアにそこまで、とは思いますが、そのきっかけとなる観察力、人に対する興味を少しでも意識してほしいですね」と岡村は話す。
普段自由に外を出歩くことのできない子どもたちにとって、このキャンプは単なるキャンプ以上の意味を持っている。それは、キャンプに参加した子どもたちの変化で知ることができる。「自分で脱いだ洋服を、自分で洗濯機に入れるようになった」「身の回りのことをなるべく自分でするように努力している」など、自分ですることへの意欲の向上によって、自分でできることの幅が広がってくる。そして、やがて子どもたちは、いま、自分が何をしたいかを素直に表現するようになるのだ。
そんな子どもたち一人ひとりの嬉しい変化に支えられて、岡村の13年間にわたるボランティア活動があったといっても過言ではない。「仕事もする。家庭もある。子どもも2人いる。そんな中で、できることをできる時にする。ワークライフバランスをしっかりと考えて、これからも自然体で続けていきたいと思っています」。第三の責任を掲げて、社員の活動を積極的に支えるジョンソン・エンド・ジョンソンの企業風土は、岡村のこれからの活動を後押しする大きな力となるだろう。

「手足の不自由な子どものキャンプ」一行。学生ボランティア約90名、子どもたちが60名と総勢150名ほどの大所帯になる。

「手足の不自由な子どものキャンプ」企画から、研修、実施までの流れ

1 日程・研修カリキュラムの決定

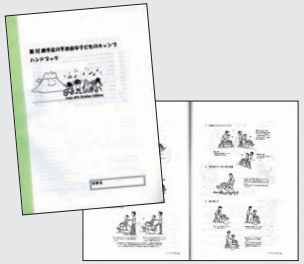
キャンプ実施までの日程の調整および、運営スタッフがそれぞれ担当を決めて、カリキュラム内容を確定していく。

2 学生ボランティアの募集

新聞をはじめ、チラシ、ホームページ、フェイスブックなどのソーシャルネットワークを駆使し、3~4月にかけて募集告知を展開する。

3 3カ月にわたるリーダー研修

運営スタッフが担当箇所を自らテキストにまとめ、講師として研修を行う。マヒに関する病気や障がいに関する座学から、食事や入浴の際の介助などの実習まで幅広い。



4 いよいよキャンプの実施へ！

キャンプ期間中のプログラムは、事前に子どもたちの希望をヒアリングし、現地で何をするか自由に決めていくシステム。ボートに乗りたいとか、飯ごう炊さんがしたいとか、さまざまなチャレンジが子どもたちを待っている。

1 山中湖では、ボート遊びにチャレンジする。
2 初めての花火に子どもたちも夢中になる。
3 今日は、飯ごう炊さんでカレーをつくる。
4 積極的にレクリエーションタイムをリードする。
5 ジーンズを思い思いにペインティングして楽しむ。

©Johnson & Johnson K K.2015

Our Volunteer Activity Story

新入社員の研修プログラムにボランティア体験を再設定

ボランティアは、もっとカジュアルでいい。

**メディカル カンパニーの人事部人材開発グループに籍を置くとともに、JJCCのサポーターでもある高尾千香子。
新入社員の研修担当となった彼女が研修プログラムにボランティア体験を再設定した
その経緯と狙いについて話を聞かせてもらいました。**

ボランティアに対する目からうろこの新たな認識。

実は、「ボランティア」という言葉にあまりいい印象を持っていませんでした。いま思えば、それは中学生の時に経験した、初めてのボランティアが原因だったようです。お年寄りのからだを拭いたり、排尿や排便のお手伝いをしたり、初めてにしては介護ヘルパーさながらの、ハードなボランティアだったことも事実です。それだけにお年寄りのちょっとしたわがままにも「こんなにやってあげているのに…」という気持ちが働いてしまいました。私自身、左手に障がいを持っていて、ケアを受ける側の立場も少なからず理解できていたはずなのに。以来、ボランティアをやる人の中に「やってあげている⇒自分だけが満足」といった部分が少しでも見えると、どうしても偽善的に感じてしまい、自分自身も同じように見えるのではないかと、一歩を踏み出すことができずにいました。しかし、JJCCのお話を聞いた時、自分が興味を持ってできること、自分で楽しみながらできることが、結果誰かのためになっているという点に新鮮な感動を覚えたのです。

ボランティア体験を新入社員の研修プログラムに。

ジョンソン・エンド・ジョンソンには、2013年に中途入社して、現在は人事部の人材開発グループに在籍しています。社員を対象としたさまざまなプログラムを企画・運営するセクションですが、入社して間もない私に任されたのは、なんと新卒新入社員の研修担当という大役。私なりに何かよりよい試みはできないかと考えた時、思いついたのが新入社員の研修でボランティア活動を通じて、ジョンソン・エンド・ジョンソンへの理解を深めてもらうことでした。もともと研修プログラムにはさまざまなものがありますが、これなら地域貢献を企業の責任と位置づけているジョンソン・エンド・ジョンソンの価値観をよりダイレクトに理解してもらえると思ったのです。もちろん、何ごとも自分で経験し、理解していなければ、それを人に課すことはできません。そこで実際に自分でボランティアをしながら、受け入れ先となる認定特定非営利活動法人「ファミリーハウス」の方々に、企画から実施にいたるまでさまざまな相談に乗っていただきました。

難病の子どもと家族の宿泊施設のお掃除ボランティア。

ファミリーハウスとは、小児がんなど難病の子どもと家族のために、経済的負担をかけずに安心・安全に滞在できる場所、そして気軽に悩みを話せる場所を提供する団体です。私が研修プログラムとして考えたのは、ファミリーハウスの宿泊施設のお掃除ボランティア。難病の子どもを抱える家族が泊まる施設なので、ただ掃除をすれば済むというわけにはいきません。居室の拭き掃除はもちろん、トイレ、ガラス窓、クローゼットまで、細部にわたる丁寧な掃除が求められます。そこで、研修の約2週間前にランチセッションを設け、施設の設立背景への理解を通じて参加する際の心構えが持てるよう配慮しました。研修の実施場所は、亀戸にある全20室というファミリーハウスの中でも比較的規模の大きな宿泊施設。当日は新入社員を4つのグループにわけ、ゲストルームを中心にエントランスやキッチン、リビングルームなどの各エリアをローテーションする形で進めました。掃除の合間には団体の理事の方が施設を案内してくださるとともに、施設を利用するご家族の思いやエピソードなどを話してくださったのも大きな意味があったと思っています。

普段目の届かないところも丁寧に掃除をします。

研修に参加した新入社員。充実感にあふれています。

より自然な行為としてボランティアができる企業風土。

新入社員の皆さんからは、「自分がした仕事の先に誰がいるのか、どんな思いを抱いているのかをより身近に感じられた」といった感想や、「今回の体験を契機に、これからも続けていきたい」という希望が数多く寄せられました。私としては、これをきっかけにボランティアとどう関わっていくべきかを考え、自らの成長に結びつけてもらえたら、と思っています。実のところボランティアは、行動に移すまでよほどの気持ちがないとできないものだと思います。でも、ジョンソン・エンド・ジョンソンでなら、ボランティア休暇とか、ボランティア月間とか、自分が「やります」と手さえ挙げれば、肩ひじ張ることなく、よりカジュアルな行為として活動できる。考えてみれば、会社がこうした環境を提供してくれているのは、すごいことではないでしょうか。ジョンソン・エンド・ジョンソンならではの社会貢献に対する価値観が、新入社員一人ひとりの心にしっかりと刻まれ、カンパニーの一員としての自覚につながることを願っています。

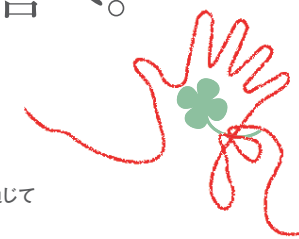
前職ではデザイン関係に携わっていたので、イベントのチラシのデザインなどもお手伝いしています。
左：日本補助犬協会とのイベント
右：東北物産品を買って復興支援

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
メディカル カンパニー
高尾 千香子

©Johnson & Johnson K.K. 2015

ジョンソン・エンド・ジョンソンの支援領域

長期的な視点で
いまある社会問題の改善へ。



「我が信条（Our Credo）」に記された第三の責任のもと、
よりよい社会をめざすとともに、よき企業市民として、
誰もが健やかな毎日を過ごせる社会の実現を目的に活動を行っています。
特に企業寄付については、優先的支援領域を設定し、
長期的な視点で、その分野で活動する非営利団体（NPO等）への支援を通じて
健康に関するさまざまな社会問題の改善をめざします。

非営利団体（NPO等）への優先的支援領域について

未来のよりよい社会の実現を担う「子どもへの支援」、そして家庭・社会で大きな役割を担う「女性への支援」とともに、「東日本大震災からの復興支援」についても優先的領域として位置づけ、それらの領域で活動を展開する非営利団体（NPO等）への支援を行っています。

我が信条（Our Credo）

よき企業市民として　／　健やかな毎日のために

▼

非営利団体（NPO等）への支援における優先的支援領域

子どもへの支援

子どもたちは未来の社会を築き、発展させていく存在です。子どもたちが健康でこころ豊かに育ち、希望に満ちた未来へ大きく羽ばたくことができるような環境づくりをめざしています。

女性への支援

女性は、よりよい社会をつくるための一員として大切な役割を果たしています。家庭や社会が健全に営まれるためにも、女性が生き生きと輝く社会の構築が不可欠と考えています。

東日本大震災復興支援

震災後の復旧プロセスは終了しても、復興へのプロセスはまさに進行中。被災地への支援を長期的な視点で捉え、これからも地域にニーズがある限り、さまざまな形で積極的な支援に取り組みます。

その他の支援

こころが元気に保たれなくては、健全な社会の実現はできません。また、高齢者が生きがいを持って暮らせることも健全な社会の条件といえます。こうした社会をめざして、あらゆる分野への支援を行っています。

非営利団体（NPO等）に対する支援活動の流れ

健康に関する社会問題に対して長期的な視点で取り組むため、こうした分野で活動する非営利団体（NPO等）に対しプロジェクトへの助成を行っています。私たちの役割は、非営利団体（NPO等）と信頼関係を結び、解決したい社会問題に見合ったプロジェクトが、めざす成果を最良の形で実現できるよう、プロジェクトの実施をさまざまな側面からサポートしていくことです。

支援領域の決定

その時々の社会的ニーズにもとづき、支援が必要とされている領域を議論のうえ確定します。近年は特に、子ども、女性、東日本大震災からの復興という3つの領域に焦点をしぼり、優先的支援領域として活動しています。

▼

具体的な社会問題の精査・抽出

確定した支援領域において、具体的に問題を洗い出し、精査したうえで取り組みたい問題を決定します。例えば、現在、子どもの領域では乳幼児の不慮の事故、女性の領域ではシングルマザーの社会的・経済的支援が少ないといった問題などが存在しています。

▼

パートナーとなる非営利団体（NPO等）の選出

取り組みたい問題を決定した後は、その改善に向けて実際に行動できる非営利団体（NPO等）を選出します。選出にあたっては、JJCCメンバーからの推薦や、その領域に詳しい有識者のアドバイスなどを参考にします。また、非営利団体（NPO等）を支援している中間支援組織から紹介を受けることもあります。

▼

助成プロジェクトの決定

選出された複数の非営利団体（NPO等）に対し、問題の改善に向けたプロジェクトの提案を打診します。提案された各プロジェクト案をJJCC内で審議し、その目的、構成、短期および長期の社会的インパクトとその測定方法、スケジュール、そして予算等を基準に、問題改善に向けて最も効果的で、かつ実現可能なプロジェクトへの助成を決定します。

▼

プロジェクトの実施

プロジェクトは、基本的に非営利団体（NPO等）が中心となって進めていきます。JJCCメンバーは、非営利団体（NPO等）との定期的な打ち合わせや現場の視察等を通して進捗を確認し、必要に応じて、より効果的かつ効率的な実施のためのアドバイス等を行います。

▼

社員の参加

プロジェクトの中には、JJCCメンバーだけでなく、ジョンソン・エンド・ジョンソングループ各社社員全体の協力によって、より一層の効果が期待できるものがあります。例えば、東日本大震災復興支援に合わせた子どもたちへの絵本の寄付、プロジェクト実施に必要なワークショップ資料の改善などです。こうしたプロジェクトでは、できる限り社員に積極的な呼び掛けを実施し、協力をお願いしています。

▼

プロジェクト効果の検証

プロジェクトは、すべて1年周期で管理されます。多くは、実施を複数年で計画していますが、その場合も1年ごとに正式な報告書の提出を義務づけ、効果を検証したうえで、当初計画のまま継続するか、変更が必要かなどを議論します。

助成においてJJCCが重視すること

❶お互いの思いを共有する

プロジェクトの対象となる人々の生活や社会に、よりよい変化を起こすことをめざしています。そのためには、めざす方向や実現したい社会のイメージをパートナーである非営利団体（NPO等）と共有することが不可欠です。

❷明確で具体的な目標を設定する

取り組む社会問題は複雑で、解決策はひとつではありません。助成にあたっては具体的な目標設定を重視することで、解決策を正確に整理するとともに、非営利団体（NPO等）と目線を合わせて最も効果的な形で問題に取り組むことができるようにします。

❸効果を検証する

プロジェクトが、計画通りに進まない場合もあります。そこで実施後には必ず、当初計画と比較してどこまで達成できたか、また、結果が社会にどのような影響を与えたかなどを非営利団体（NPO等）とともに検証します。検証結果は、今後のフォローや次年度のプロジェクトの改善につなげます。

©Johnson & Johnson K K.2015

安全に、健全に、健やかな成長を願って。

子どもたちは未来の社会を築き、発展させていく存在です。
だからこそ一人ひとりの子どもが健康でこころ豊かに育ち、
希望に満ちた未来へ羽ばたくことができる、
そんな環境づくりをめざすことが大切だと考えています。
複雑化する現代社会にあって、さまざまな困難に直面している子どもたちを支え、
未来の可能性をいまよりもっと広げたい。
そのために必要とされていることは何なのか。
それを考え、発見し、そして、
それらの問題に対して取り組む活動を支援していきます。

※東日本大震災の被災地域での子どもへの支援はP15～16をご覧ください。

助成プロジェクトのご紹介

幼い命を不慮の事故から守る保育士を通じた啓発活動

家庭内での乳幼児の事故予防啓発事業

社会福祉法人日本保育協会
http://www.nippo.or.jp/

厚生労働省の調査によれば、毎年、1歳以上の子どもの死亡原因の上位に「不慮の事故」が入っています。そして、その多くが家庭内で起きたものであり、周囲の大人が注意を向けることで防ぐことができたといわれています。こうした家庭内における乳幼児の事故を防止していくため、事故予防の正しい知識や子どもの成長に合わせた留意点などを掲載した保護者向け資料「子育て安心カード」を作成し、その内容を把握した保育士を介して配布する事業を支援しています。これまでに賛同した全国44箇所の保育園で保護者への指導と配布が行われました。

日本の教育現場の課題を解決するリーダーシップを備えた教師を育成

ネクスト・ティーチャー・プログラム

特定非営利活動法人Teach For Japan
http://teachforjapan.org/

現在、日本の学校現場は多くの課題を抱えており、貧困や教育格差の問題も極めて深刻な状況になっています。日本はOECD加盟国の中でも、"子どもの相対的貧困率※"が高い国のひとつであると指摘されています。これらの複雑で大きな課題を解決するリーダーシップを備えた教師を育成・輩出し、子どもたちが新しい時代を切り拓くためのチカラを養うことができるよう支援するのが、このプログラムです。奈良県教育委員会と協働し、社会人としての経験があり、教師としてのポテンシャルが高く熱意のある支援員を派遣しています。問題を抱える学校現場の子どもたちと真摯に向き合い、子どもの学力・学ぶ姿勢の向上、また学校とともに教員採用・新人教員育成などのノウハウの構築をめざしています。

※相対的貧困率：年収が全国民が得る年収の中央値の半分未満の国民の割合で、国民の所得格差を表す指標。

支援員は「フェロー」として、学校に赴任する前に3週間の合宿型の研修を行っています。

Teach for Japan様 より

日本の教育の発展に寄与していく「当事者」として、共に。

私たちがめざしているのは、厳しい状況下にいる子どもたちに支援を行い、学力と学習意欲の向上、学習習慣の定着を実現することです。さらに中期的にはその地域全体の教育レベルを向上させ、長期的には社会全体を巻き込んだ教育改革を実現させることです。それだけに、活動にはさまざまな方の理解やご支援は欠かすことができないものですし、私たちも、支えてくださるすべての方に感謝を忘れてはいけないと思っています。機会があれば、直接、現在の教育現場やそこで活躍するフェローの姿を見ていただき、問題意識を共有し、課題の解決に向けて議論等をさせていただければと思っています。そして、共に「当事者」として日本の教育の発展に寄与していきましょう。

特定非営利活動法人Teach For Japan CEO / Founder
松田 悠介様

支援を通じて、
Exchange

つながる思い
Letters

JJCC支援担当者 より

高い志と具体的な目標設定を支える子どもたちへの熱い思いに共感。

Teach for Japan様とのおつきあいは、東日本大震災後の被災児童への学習支援活動を知ったことがきっかけでした。私自身、2人の娘の母親として、微力ながら子どもたちの未来に貢献できればと考えていました。代表の松田様をはじめとするスタッフの方々は、より多くの子どもたちに素晴らしい教育を受けさせたいという熱い思いを持っていらっしゃいます。さらには、日本の教育そのものを変えていきたいという高い志と明確な目標もお持ちです。そのビジョンを実現するための具体的な目標設定と確実な戦略実行の実例は、私自身の仕事の参考にさせていただくこともあります。JJCCの活動に対しても、「私たちの活動を知っていただく機会になるのであれば」と常に前向きにご対応いただけるので、とても感謝しています。

ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）メディカル カンパニー
佐藤 久美子

©Johnson & Johnson K K.2015

すべての女性が、生き生きと輝ける社会へ。

この数十年で女性の社会進出が進み、
よりよい社会をつくるために
その一員として大切な役割を果たし、活躍の場を広げています。
一方で、子育てをしながら働くことに悩みを抱えていたり、
経済的な困難や助けを求める相手がいないために
孤立感を感じている女性も少なくありません。
私たちは、一人ひとりの女性に寄り添い、総合的な活動支援をめざしています。

助成プロジェクトのご紹介

シングルマザーの皆さんが子どもたちと一緒に生き生き楽しく

シングルマザーの居場所づくりとサポーター養成事業

特定非営利活動法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ
http://www.single-mama.com/

シングルマザーの方の多くが、経済的な悩みを抱え、社会的にも孤立しやすい状況に置かれています。そこで、シングルマザーが就労や子育てなどに関する悩みを互いに相談し合い、解決に必要な情報が得られる居場所づくり（相談会）を全国各地で行っています。同時に、こうしたシングルマザー支援活動が地域でより効果的に行われるよう、地方市民団体の職員などに対してスキルアップ講座を実施しています。

ひとり親家庭への幅広い就労支援で経済的な自立をサポート

ひとり親家庭への就労支援事業

ひとり親Tokyo　一般財団法人東京都母子寡婦福祉協議会
http://www.tobokyou.net/

ひとり親家庭とは、母親または父親の片方いずれかと、その子どもからなる家庭をいいます。そして、ひとり親家庭にとって、大きな問題となるのが経済的な不安です。そんなひとり親家庭の経済的自立を目的として、女性を対象とした就労支援事業を実施しています。具体的には、資格の取得支援、看護師への道セミナー、パソコンの使い方講座、メールの書き方講座、ひとり親同士の交流会などを実施しています。

傷ついた心を癒し自分らしく輝くための講座を広めています

こころのケア講座

特定非営利活動法人レジリエンス
http://resilience.jp/

DVや虐待などはなぜ起こるのか。暴力はどんな影響をもたらすのか。DVや虐待、パワハラなど、さまざまな原因による傷つきからの回復のための方法などについて、ファシリテーター（進行役）とともに学び考え、女性自身が自分のパワーを再認識し、新しい自分の姿を見つけていく講座です。さらに、講座が実施できるファシリテーターの養成も行っています。

ストレスとの上手な付き合い方からよりよい子育て・教育を支援

親子のためのストレスマネジメント講座

特定非営利活動法人えじそんくらぶ
http://www.e-club.jp/

現代社会で生きている以上、誰もが何らかのストレスを受けており、それを避けて通ることは簡単ではありません。しかも、そんな親をはじめとする大人のストレスが、感受性豊かな子どもに対して大きな影響をおよぼすことも少なくないのです。大切なのは、ストレスを効果的に軽減し、上手に付き合っていく方法を知ること。講座では、子どもはもちろん、子育てに関わる大人のストレスをマネジメントすることで、「よりよい子育て」「よりよい教育」ができるようサポートしています。

支援を通じて、
Exchange

つながる思い
Letters

ひとり親Tokyo様 より

ひとり親家庭の幸せを支える真に必要なご支援。

本年度もジョンソン・エンド・ジョンソン様からのご支援により、ビジネスに役立つ資格についてのセミナー「資格が就職に有利って本当?」、看護師への再就職を支援する「看護師への道」など数多くの事業を開催することができました。ありがとうございました。当財団は、65年間皆さまのご支援や先人の先輩方の努力によりひとり親支援の活動を続けていますが、昨今ひとり親世帯は増加の一方であり、またひとり親世帯の貧困もますます深刻になってきています。御社からのご支援は、ありきたりのものではなく、より必要な支援をひとり親家庭の皆さんへ届けることのできる貴重なご支援です。今後ともひとり親家庭の親と子どもたちが幸せな生活を送れるよう、よろしくお願いいたします。

ひとり親Tokyo　一般財団法人東京都母子寡婦福祉協議会 会長
髙田 伊久子様

JJCC支援担当者 より

これからも多くの方々のよりよい人生のためにできること。

私自身ひとり親家庭の事情をよく知らない状態から引き継ぎを行い活動を進めてまいりました。無知な私にも親切にひとり親家庭を取り巻く問題や団体運営の思いなどを教えていただき、たいへん勉強になりました。ジョンソン・エンド・ジョンソンからは、ひとり親家庭の親御さんに対するスキルアッププログラムへの支援や、弊社会議室の貸し出しなどさまざまな形で協力させていただきました。こういった機会から取り組まれている課題の大きさ、難しさを知るとともに、それに対して真摯に向き合っていらっしゃる姿勢を拝見し、学ばせていただくことが多かったのも事実です。解決すべき課題は多いですが、今後とも多くの方々がよりよい人生を過ごせるような活動を続けていただければと思います。

ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）メディカル カンパニー
高瀬 昇太

©Johnson & Johnson K K.2015

明日へと続く、復興への確かな道のり。

東日本大震災の発生から3年…。
人々の記憶から薄れがちな「いま」だからこそ、
時間とともに変化する被災地の状況を把握し、
その時々の地域のニーズを長期的な視点で捉え、
さまざまな形で積極的に支援を続けていきたいと
考えています。
例えば、仮設住宅におけるコミュニティ活動支援や、
地域の再生支援、そして被災地における
子ども、女性支援という観点で
一人ひとりの声を大切にした活動支援を行っていきます。

助成プロジェクトのご紹介

子どもたちの運動不足や保護者の不安、ストレスを解消

地域で育む子どもの発育・発達プログラム

一般社団法人地球の楽好（日本財団）
http://chikyuunogakkou.org/

東日本大震災による原発事故の影響で、福島県では屋外活動を制限された子どもたちの運動不足、子育て中の保護者の不安やストレスが深刻な問題になっています。そこで、子どもたちの健やかな発育を目的とした学校体育館などでの運動プログラム、保護者に正しい知識を提供し不安を解消する勉強会を実施しています。

子どもたちの笑顔がはじける遊びと学びの支援活動

土曜子どもキャンパス in 福島大学

国立大学法人福島大学うつくしまふくしま未来支援センター／人間発達文化学類
http://111.68.211.96/volunteer/

2012年4月より福島大学を会場として、仮設住宅や借り上げ住宅に避難している小・中学生を対象に「土曜子どもキャンパス（年間15回）」を開催しています。子どもたちがのびのび遊べる場所の提供、わからないところを大学生が教えてくれる学びの教室など、大学キャンパス内で遊びと学びの支援活動を展開しています。

新たな「仕事づくり」への挑戦を経営人材の派遣を通じて支援

被災地への右腕派遣プログラム

NPO法人ETIC.
http://www.etic.or.jp/

被災地域では、いま、情熱と志を持つ地域のリーダーたちによる新たな「仕事づくり」への挑戦がはじまっています。しかし、そこにはビジネススキルの高い経営人材の確保が欠かせません。そこで被災地の方々の「健康」に寄与し、東北の新しい「仕事づくり」を牽引するプロジェクトを公募。リーダーの右腕となる人材を派遣することで事業推進を支援するとともに、被災地域に新しい「仕事」を育てていきます。

日本の未来を担う人材の育成を被災地から

複合体験施設モリウミアス

公益社団法人sweet treat311
http://www.moriumius.jp/

宮城県石巻市雄勝町において、築90年の廃校を再生させ、学びと交流の拠点として活用しています。農業（土づくり）や木工（家具づくり）など自然の循環や共生を学ぶ体験プログラムの提供を通じて、被災地の子どもたちの「サステナブルに生きる力」を育む活動をお手伝いしています。

現場のニーズに対応し充実した医療サービスの提供に貢献

ポータブル医療機器を仮設診療所に寄贈

一般社団法人日本災害医療ロジスティック協会
http://www.jameld.jp/

大災害発生時の医療支援では、医療関係者の派遣、医薬品の搬送、現地の業務調整、情報収集、現地機関との連絡調整等のロジスティックス機能が重要な役割を果たします。日本災害医療ロジスティック協会は、東日本大震災の被災地である岩手県大槌町に開設した仮設診療所に、現在のニーズに合わせて災害時にも使用できるポータブル医療機器等の寄贈を行い、診療活動の充実・医療環境の改善をサポートしています。

日本財団様 より

資金援助だけにとどまらない企業の専門性を活かした支援に感謝

福島県の各地域では、震災以降さまざまな問題から子どもの屋外活動が自由に行えなくなっています。そのため、子どもの運動不足が問題視されており、それにともない子育ての不安やストレスは高くなっています。こうした中、日本財団は御社からの寄付を通じて、「地球の楽好」を支援し、福島県に暮らす人々への支援に新たな一歩を踏み出すことができました。今回に限らず、私たちが取り組む活動は複雑な社会課題が背景にあることが少なくありません。それに対して、企業の専門性を活かした評価指標の設計や検証の促進、その質を高めるようなご支援をいただける御社の活動は、我々助成財団としてもたいへん勉強になりますし、他のプライベートファンド等にもぜひ広がってほしい在り方だと思っています。

公益財団法人日本財団
樋口 裕司様

支援を通じて、
Exchange

つながる思い
Letters

JJCC支援担当者 より

より積極的な支援と体験を通じて皆さんの心に寄り添う支援を

東日本大震災から3年を経ても、福島の子どもたちにとっては思うように外で遊ぶこともままならず、親御さんも不安を抱えたままの状況でした。我々としても何かできることはないかと考えておりましたが、そんな時、樋口さんより地球の楽好の取り組みを伺い、ぜひ運動プログラムの立ち上げサポートをさせていただければと、2014年より助成がスタートしました。地球の楽好への支援は助成だけにとどまらず、子どもたちへの絵本の読み聞かせ、宮城県にある森で一緒にからだを動かすなど多様な側面から関わることで、少しでも心により添うことができるのではないかと考えます。今後も日本財団様を通じて我々だけでは知りえない被災地や支援を必要とする方々の状況を学び、長期的により多くの方に支援を届けることができればと思っています。

ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）メディカル カンパニー
伊藤 佐和

©Johnson & Johnson K K.2015

誰もが生きやすい世の中をつくるために。

誰もが幸せを感じ、充実した健康的な生活を送るためには、
からだの健康と同じようにこころの健康も大切です。
いまの日本は、世界で最も高齢化が進んでいる国の
ひとつであるとともに、核家族化やコミュニティでの
つながりの希薄さが問題になっています。
こうした生活の中では、仕事や人間関係の悩み、ストレスなどから
気持ちが弱くなり、自信を失ったり、加えて貧困や病気など
さまざまな困難に直面している人が少なくありません。
私たちはお互いに支え合うことができる社会をめざす活動を支援しています。

助成プロジェクトのご紹介

患者家族の知識と体験を他の患者家族に伝えるピアサポート

精神疾患患者の家族による家族学習会

特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構・コンボ
http://comhbo.net/

コンボでは、精神疾患を持つ人たちが主体的に生きていくためのさまざまな活動を行っています。統合失調症などの精神疾患の患者を抱える家族には、患者を抱える家族自身がその知識と体験を伝えるピアサポートが効果的といわれています。この世界的にも実績を上げている家族による学習会の普及や家族同士の交流を通じて、疾患や治療、対処法などの知識はもちろん、社会的孤立や差別偏見からの解放を支援しています。

つらさや苦しみを抱えた人たちがいつでも安心して訴えられる命の窓口

自殺防止ホットラインの充実

特定非営利活動法人国際ビフレンダーズ 東京自殺防止センター
http://www.befrienders-jpn.org/

自殺したいほどのつらさや苦しみを抱えている人たちが、いつでも安心して訴えられるよう、彼らの心の叫びを聴き、受け止める自殺防止ホットラインの充実を図っています。また、そうした人々の気持ちに寄り添うボランティア相談員拡充のための新規募集や、既存相談員のスキルおよびモチベーションの向上を目的とした研修を行い、自殺防止への取り組みを広げる活動を展開しています。

いつまでも住み慣れた場所で暮らし続けられるコミュニティを

高齢者への食支援活動をネットワーク化

一般社団法人全国老人給食協力会
http://www.mow.jp/

核家族化などの影響により、一人暮らしの高齢者がますます増える傾向にあります。全国各地には、このような地域の高齢者の食生活を支援している団体が数多く存在します。こうした支援を行っている全国の団体に対して、国の政策情報や団体の事例紹介、ネットワーク支援のためのセミナー開催などを通じて、誰もが高齢になっても住み慣れた場所で暮らし続けることのできるコミュニティの拡充をお手伝いしています。

自主的に行われている社員のボランティア活動を応援

寄付申請

各社社員の自主的なボランティア活動を応援することを目的とした寄付申請を受け付けています。主に社員がボランティアとして参加している非営利団体（NPO等）を、活動資金やジョンソン・エンド・ジョンソン製品の寄付という形で支援しています。2014年度は約40団体への寄付を実施しました。

支援を通じて、
Exchange

つながる思い
Letters

全国老人給食協力会様 より

一人ひとりの顔が見える協働による支援のありがたさ。

ジョンソン・エンド・ジョンソンの社会貢献は、さまざまな部署からJJCCに参加している社員の皆さんと、我々の協働によって行われるのが最大の特徴だと思います。課題意識を共有して効果のある方法を一緒に考え、実際にからだを動かして参加する、一人ひとりの顔が見えるご支援のありがたさは他にはないものです。ボランティアプログラムでは、たくさんの社員の方に地域の食事サービスの活動に参加していただきました。そして、そうした機会にお会いする社員の皆さんが、企業人の枠を超えてさまざまな社会課題に積極的に関わっていることに敬服しています。私たちのような団体の活動がもっと社会に開かれたものになるよう、企業の社会貢献活動のリーダーとしての今後の活動に期待しています。

一般社団法人全国老人給食協力会 専務理事
平野 覚治様

JJCC支援担当者 より

食事サービス活動を通しての学びが、貴重な知識・体験になる。

ジョンソン・エンド・ジョンソンでは、食事サービスの広報普及事業に対してサポートをさせていただいています。その一環として、本社カフェテリアにて全国食事サービス活動セミナーを開催しました。私自身は2013年からということもあり、まだまだ活動への理解が足りていません。皆さんとお話をする中で、いろいろと勉強をさせていただいています。特に、今年7月末の全国食事サービス活動セミナーでは、農林水産省や厚労省老健局の方からの介護食品や地域包括ケアシステムの動向についての説明、各団体の活動、またコミュニティオルガナイジングの手法の説明など盛りだくさんの内容でさまざまなことを学びました。いまの私にとって、この活動を通しての学びは、非常に貴重な知識・体験になっています。

ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）メディカル カンパニー
山中 悟

©Johnson & Johnson K K.2015

社員によるボランティア活動

誰かの役に立ちたい、その思いをチカラにかえて。

社員のボランティア参加を促進することも、JJCCに課せられた重要なテーマのひとつです。
さまざまな取り組みに呼応し、社員が自主的に関わるボランティア活動の輪が、いま大きな広がりを見せています。

被災地視察&窯(陶芸用)の立ち上げをサポート

ヤンセンファーマ(株)
青木 知枝

東日本大震災の被災地を訪れ、「仮設住宅の皆さんと一緒に陶芸品作成」「窯用レンガ運びと潮焼き用の薪づくり」をしました。各回とも午前中に作業をし、午後は「被災地視察」という内容でした。午後の被災地視察では、家々が立ち並んでいたであろう場所が、一面の草原となったまま放置され、3年前から時が止まっているようでした。被災地への支援継続の必要性をあらためて考えさせられました。

本社1階でさくらベーカリーの出張販売

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
コンシューマー カンパニー
安達 麻奈美

本社1階ロビーに、知的障がいを持つ方が働くさくらベーカリーの出張販売がやってきました。昼時には多くの社員で賑わい、パン15種275個(ランチセット、パンセット含む)、焼き菓子15種270個を販売し、売上金額計9万2,170円を達成しました。

ブラインドサッカー

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
コンシューマー カンパニー
大隅 耕介

ブラインドサッカー日本選手権の大会運営ボランティアをしました。初日はあいにくの雨で来場者が少なく、人けが少ない会場外でビラ配りを行い、2日目は着ぐるみを着て大会を盛り上げました。また、間近で試合を観て、その迫力と上手さにとても驚きました。

スワンベーカリーでの親子パン教室

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
メディカル カンパニー
嶋村 正信

日々忙しい私には子どもと一緒に過ごす楽しい時間になりました。創設者の想い、店舗での指導方法、障がいによって変わる就職の可能性といった話は、私だけでなく子どもにとっても大変よい学びになったと思います。

前橋市の児童養護施設で清掃&アクティビティ

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
メディカル カンパニー
伊藤 由紀子

児童養護施設「鐘の鳴る丘 少年の家」の子どもたちと一緒にゴミ拾いをし、おいしい昼食を食べた後、ドッジボールやゲームなどのアクティビティを楽しみました。このプログラムは2度目の参加ですが、前回一緒に遊んだ子どもとも再会でき、たいへん感動しました。

難民支援協会の「食べるボランティア」

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
メディカル カンパニー
松林 由香

ミャンマーからの難民のご夫婦が営むレストランでの「食べボラ」に参加しました。モヒンガーという麺料理や、チキンとジャガイモのカレー煮込みなどをいただきました。参加者からは「おいしい食事と丁寧な説明がよかった」「難民についてよくわかった」などたいへん好評でした。食べて、飲んで、何か気づきを持って帰ることが大きな支援になるユニークなボランティアだと思います。

こころみ学園のワイナリーでお手伝い

ヤンセンファーマ(株)
山田 邦永

約150名の重度の知的障がいを持った方々が、家族のように暮らすこころみ学園が運営するココ・ファーム・ワイナリーで、ぶどうの袋かけ作業をお手伝いしました。強い日差しの中、腕を高く上げて行う作業は骨の折れるものでしたが、みんなと楽しくお手伝いすることができました。作業後にいただいたワインは疲れたからだに染みわたり、心地よい疲れとともに至福のひと時をもたらしてくれました。

本社でファミリーハウス寄贈用のビーズストラップづくり

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
メディカル カンパニー
青木 桜子

小児がんなど難病の子どもとその家族のための宿泊施設「ファミリーハウス」では、誕生日の子どもにプレゼントを渡しています。そこでプレゼント用のビーズストラップづくりを実施し、300個の完成品を寄贈しました。一見難しそうなストラップづくりも、参加者同士が教え合い、ビーズのきらめきを楽しみながら完成させることができました。

大森授産所のボーリング大会

ヤンセンファーマ(株)
小林 秀行

大森授産所のボーリング大会に参加しました。大森授産所は、重症心身障がい者の皆さんが社会参加をめざして、就労訓練を行う施設です。今回のレクリエーションの他にも、カラオケや釣り、クッキングなどのイベントが定期的に行われているので、また参加したいと思います。

通所介護施設ふきのとうデイホームで交流

ヤンセンファーマ(株)
嶋村 暁子

高齢者の方々とお話ししたり、一緒に体操したりと楽しく過ごしました。通所されている方は、一人で出かけることが難しく、このような場所で他の人との関わりを持つ機会をつくっているそうです。だから私のようなボランティアが来ること自体がとてもよい刺激になるそうです。

買うボランティアで被災地支援

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
ビジョンケア カンパニー
二木 志乃
ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
コンシューマー カンパニー
森 優子

「買うボランティア」では2011年の東日本大震災以降、被災地(作業所・特に被害の多い地域)の製品を本社カフェテリアで販売しています。毎回100万円を超える売り上げがあり、多くの社員が参加しています。

セカンドハーベストで炊き出しのお手伝い

ヤンセンファーマ(株)
太田 建太郎

スーパーマーケットなどから「食べられるけど商品としては売れない」野菜をわけてもらい、ホームレスの方々のために炊き出しをするセカンドハーベスト。1回で300名分という、大量の料理の下ごしらえをお手伝いしました。まだまだみずみずしい野菜や果物が「一部が傷んでいるから」などの理由で廃棄されてしまうという現実を知り、これまで自分も無駄にしてきた食材がたくさんあったと考えさせられる体験でした。

児童養護施設を今年も訪問

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
メディカル カンパニー
井田 一宏

今年も児童養護施設 遥学園を訪問し、子どもたちと汗だくになりながら遊びました。帰り際に、「ありがとう」と書かれた大きな手紙をいただいたのが印象的でした。

湊川神社周辺の清掃活動

ヤンセンファーマ(株)
工藤 傑

毎年恒例で行っている湊川神社周辺の清掃活動を行いました。周辺には空き缶、吸い殻などが多く捨てられていました。朝8:00からおよそ1時間半、清掃活動を行いながら「我が信条(Our Credo)」の第三の責任を再認識しました。

日本介助犬アカデミーのプロボノに参加

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
メディカル カンパニー
田島 文子

日本介助犬アカデミーは、介助犬を連れている障がい者の方々がレストランや病院で受け入れ拒否をされないよう、補助犬法の正しい知識を広めたり、介助犬に関する調査報告や情報を発信することを目的とした団体です。今回は現場での課題をヒアリングした後、参加者7名が議論し、今後の方向性について提案を行いました。提案内容は理事の方々にも喜んでいただき、今後の資金調達の際に活用していただければと思います。

ドナルド・マクドナルド・ハウスで清掃ボランティア

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
ビジョンケア カンパニー
横森 麻里

ドナルド・マクドナルド・ハウスは、病気の子どもとその家族が利用できる滞在施設です。今回は所属チームで、本郷の東大敷地内にある東大ハウスの掃除をさせていただきました。チームで張り切ってからだを動かし、気持ちのよい汗をかきました。また、ちょうど七夕飾りの準備中だったので、一人ずつ気持ちを込めて短冊を書いて飾らせていただきました。

©Johnson & Johnson K K.2015

ジョンソン・エンド・ジョンソンの社会貢献活動を支えるその他の取り組み

社員のボランティア意識を高め、サポートするために

■月例イベント

毎月、ジョンソン・エンド・ジョンソンの本社では社員が気軽に参加できる活動プログラムを提供しています。あまり知られていない社会問題を社員が知り、周りに伝えることが解決の第一歩と考え、啓発活動や体験会等を行っています。具体的には、公共施設、ホテル、スーパーマーケット等での補助犬（盲導犬、介助犬、聴導犬）の受け入れ問題、日本における難民問題、盲人体験を通じた障がい者の生活問題などを取り上げました。

自然災害の被災地を支援するために

■緊急災害支援募金・物品寄付

地震などの自然災害によって大きな被害がもたらされた地域に対して、被災された人々の生活支援や地域の復興を目的として緊急災害募金、物品寄付などを実施しています。グループ社員から集められた募金に加え、ジョンソン・エンド・ジョンソンからは社員の募金と同額の寄付を現地の支援団体を通じて被災地へ届けます。2014年度は頻繁に起こった大雨による土砂災害、水害に対して、全国の社員からタオル2,878枚が集まり家屋に入り込んだ泥の掃除などのために使われました。

JJCCの活動や非営利団体（NPO等）の活動を知るために

■コントリビューション・ウィーク2014

2014年9月17日から19日までの3日間、JJCCがプロジェクト助成をしている非営利団体を招き、「いま」どのような社会課題があり、その解決をめざしてどのような活動を行っているか、その成果についてお話をいただきました。またグループ各社のトップが社会貢献活動への思いや、自身が実践している活動を紹介し、社員にボランティア参加を呼びかけました。

非営利団体（NPO等）のスキルアップおよびネットワーキングのために

■NPOパートナーシップデイ

2014年12月9日、プロジェクト助成をしている非営利団体および優先的支援領域で活動を行う非営利団体を本社に招き、団体の活動力強化のための「伝えるコツ」講演会を行いました。その後のJJCCメンバーも交えての懇親会では、同じ領域で活動を行う団体同士での情報共有やその他の団体との新たな活動協力のご縁を見つけるネットワーキングの場となりました。

JJCC のような組織を持つ企業が増えれば、きっと社会も変わると思います。

ジョンソン・エンド・ジョンソンの皆さまに長年ご協力いただいてきた音訳活動「声の花束※」で、ボランティアの方々に音訳していただいた音声ファイルは300を超えました。それらのファイルは、当協会のホームページから全世界どこでも無料でダウンロードできます。最近では、視覚障がい者だけでなく、高齢者や日本語を学ぶ外国人の方にも活用されるユニバーサル・デザイン事業となっております。最近は、御社のように社員の方々を中心にしたボランティア活動に取り組まれる企業も増えており、そうしたご相談を受けることも多いのですが、企業が社会貢献活動を推進するにあたり、“社内に横断的なサポーター組織をつくる”という御社の手法がとても参考になります。このアプローチが多くの企業に広がれば、もっと多くの方に参画していただけるのではないか。企業とNPOをつなぐ中間支援団体として、そんな社会を創ることをめざしていきたいと考えております。

※ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）コンシューマー カンパニー「赤ちゃん相談室」（http://www.johnsons.jp/baby/faq/）に掲載されている健康情報を音訳しています。

公益社団法人日本フィランソロピー協会
シニアマネージャー
加勢川 佐記子

ヘルシー・ソサエティ賞

人々の健康、社会福祉、生活の質の向上に貢献した方々を称える「第10回ヘルシー・ソサエティ賞」

公益社団法人日本看護協会とジョンソン・エンド・ジョンソングループは、2014年3月13日（木）、「第10回ヘルシー・ソサエティ賞」の授賞式および祝宴を開催しました。2014年は、教育者部門、ボランティア部門（国内、国際）、医療従事者部門（国内、国際）の3部門ならびに10周年特別賞で合計6組7名の方々が受賞されました。

ヘルシー・ソサエティ賞について

ヘルシー・ソサエティ賞は、学術・教育、医療、政治、ボランティア・市民活動などを通して、人々の健康、地域の保健、クオリティ・オブ・ライフ向上に多大な貢献をした個人、あるいは組織のリーダーを顕彰する目的で、公益社団法人日本看護協会とジョンソン・エンド・ジョンソングループによって2004年に創設された賞です。

● 審査のプロセス

各界の著名な有識者8名からなる審査委員会の厳正なる審査によって受賞者が選出されます。

http://www.healthysociety-sho.com

■ 開催概要

日時・場所：2014年3月13日（木）　パレスホテル東京
共催：公益社団法人日本看護協会、ジョンソン・エンド・ジョンソングループ
後援：外務省、財務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、公益社団法人全日本病院協会、公益社団法人日本医師会、一般社団法人日本病院会

教育者部門

北村 聖（きたむら せいし）

東京大学大学院医学系研究科附属
医学教育国際研究センター 教授

2000年代、アフガニスタンやラオスでの医学教育の支援を先導。「医師の教育システムは、援助が終わった後もその国の保健医療の向上に資する」という理念にもとづく活動は、国際的にも大きく評価されています。また、国内でも医学・看護教育に貢献しています。

ボランティア部門（国内）

清水 康之（しみず やすゆき）

NPO法人自殺対策支援センター
ライフリンク 代表

米国留学などを経て、大学卒業後、日本放送協会（NHK）に入局。担当した番組をきっかけに本格的に自殺対策に取り組みはじめ、2004年にNHKを退局すると同時にNPO法人「ライフリンク」を設立されました。精力的な活動は、「自殺対策基本法」成立の原動力となりました。

ボランティア部門（国際）

長濱 直（ながはま ただし）
長濱 晴子（ながはま はるこ）

日本バイオビレッジ協会
会長・事務局長

1992年、長濱直さんは勤めていた会社を退職し、中国内蒙古自治区でボランティア活動を開始。後に妻の晴子さんも加わり、生命豊かな村の創設をめざす「バイオビレッジ建設構想」実現のため、沙漠化防治に向けたさまざまな活動を展開しています。

医療従事者部門（国内）

髙橋 昭彦（たかはし あきひこ）

ひばりクリニック
院長

出身地の滋賀県で10年間地域医療に従事した後、栃木県に移り在宅医療、在宅ケアのネットワーク強化に取り組まれました。2008年、重症障がい児者レスパイトケア施設「うりずん」を開設。人口呼吸器をつけた子どもの日中預かり事業などを行っています。

医療従事者部門（国際）

徳永 瑞子（とくなが みずこ）

特定非営利活動法人
アフリカ友の会 代表

1970年代、ザイール共和国（現・コンゴ民主共和国）に渡り、医療活動を行った後、アフリカ地域のエイズ問題に取り組むため、1991年、NGO「アフリカ友の会」（2008年からNPO法人）を設立。日本では学生などの後進教育にも携わっています。

10周年特別賞

菊池 里子（きくち さとこ）

医療法人社団仁明会齋藤病院
看護部長

看護学校卒業後、いくつかの病院で師長、部長代理などを経験し、1993年に石巻市の齋藤病院に就職。同病院での勤務中、東日本大震災が発生した際、看護部長としてリーダーシップを発揮し、冷静な対処で病院の機能と患者を守ったことが評価されました。

©Johnson & Johnson K K.2015

ワールドワイドに展開される社会貢献

世界中の人々に届けたい
健やかな暮らしと笑顔。

Worldwide

グローバル戦略にもとづく、より効果的な社会貢献活動へ

ジョンソン・エンド・ジョンソンがグローバルで展開する社会貢献活動は「我が信条（Our Credo）」に記された「国際社会、および我々が暮らす地域社会に対しての責任」を拠り所として、国際社会に対してもさまざまな社会貢献活動を展開しています。2013年には50カ国以上、約600のプログラムに対して総額9億9,300万ドルにおよぶ現金および自社製品を提供し、世界中の多くの方々の生活改善をお手伝いしてきました。さらにジョンソン・エンド・ジョンソンでは、こうした活動を地域の非営利団体とともにより効果的に推進するため、グローバル戦略にもとづき積極的な取り組みを進めています。

グローバル戦略

①女性と子どもの命を救い生活を改善する

- 妊産婦と乳幼児の健康改善
- 青少年の健全な発育の支援
- 女性のエンパワメント

②社会的弱者の健康を守る

- HIV感染の予防、および感染者に対する支援の向上
- 地域が一丸となって健康維持に取り組める包括的な体制づくり

③医療従事者の強化

- 医療・介護に従事することへの興味と意欲を増進する
- 医療・介護サービスを十分に受けることができない人々に奉仕している医療・介護従事者の、スキルを向上する
- 医療・介護サービスの提供・管理体制を改善する

Millennium Development Goals

国連ミレニアム開発宣言に対する私たちの決意と対応

2000年9月にニューヨークで開催された国連ミレニアム・サミットで採択された国連ミレニアム宣言をもとに「ミレニアム開発目標※」がまとめられました。これは、開発分野における国際社会共通の目標であり、「極度の貧困と飢餓の撲滅」など、2015年までに達成すべき8つの目標を掲げています。ジョンソン・エンド・ジョンソンは、開発目標の中でも世界の女性や子どもの生活改善に関する取り組みを進めるべくコミットメントを表明しています。

※「極度の貧困と飢餓の撲滅」「初等教育の完全普及の達成」「ジェンダー平等推進と女性の地位向上」「乳幼児死亡率の削減」「妊産婦の健康の改善」「HIV／エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延の防止」「環境の持続可能性確保」「開発のためのグローバルなパートナーシップの推進」という2015年までに達成すべき8つの目標。

コミットメント

1 出産をより安全なものにすること
2 子どもの寄生虫を治療し、予防すること
3 携帯電話を使用して、重要な健康に関する情報を妊産婦に配信すること
4 HIVの母子感染を撲滅すること
5 HIVや結核、顧みられない熱帯病の治療に対する研究開発を通じた治療革新の試験的適用および効果測定を行うこと

Asia Pacific

アジア・パシフィック地域における具体的な支援

日本が属するアジア・パシフィック地域では、国連ミレニアムコミットメントを受け、ミレニアム開発目標に戦略的に取り組んでいます。

新生児蘇生プログラム

新生時仮死は100名の赤ちゃんのうち、1～10名の割合で発生します。新生時仮死は、乳児死亡の主要な原因であり、子どもの成長にも大きな影響をおよぼします。そこでジョンソン・エンド・ジョンソンでは、医療従事者への新生児蘇生法の普及を目的とした実技講習会を支援しています。

●インドでの成果

2015年までに、すべての出産時に訓練を受けた分娩解介助者が立ち会うことができるよう、21万名の医療従事者に対し新生児蘇生法を普及することをめざしています。2009年からはじまったこの取り組みの具体的成果として、2012年の段階で、2003年に比べて乳幼児の死亡率が約30%低下しました。

●中国での成果

医療従事者に対する新生児蘇生の普及支援は、中国においても10年以上前から実施されています。これまでに約9万名もの赤ちゃんの命が救われたという具体的な成果も報告されています。

Asia Pacific Contributions Committee

第8回アジア・パシフィック社会貢献親善大使任命式

アジア・パシフィック地域の社会貢献委員会を統括するアジア・パシフィック・コントリビューションズ・コミッティ（APCC）では、自ら積極的に社会貢献活動に取り組む社員を各国から1名ずつ「APCC社会貢献親善大使」として任命します。今年度各国・地域の代表となった13名の親善大使は、任期中の1年間、それぞれの国で社員の社会貢献への参画推進に積極的に取り組みます。2014年日本からはジョンソン・エンド・ジョンソン(株)ビジョンケア カンパニーの後藤悠子が任命されました。

Topics

世界最大のスポーツの祭典

FIFAワールドカップに結集した人々の思い

東日本大震災の被災現場からブラジルへ

ジョンソン・エンド・ジョンソンは、熱狂・興奮とともに幕を閉じた2014 FIFAワールドカップ™ブラジル大会で、初めてのオフィシャルヘルスケアスポンサーを務めました。"Care"（=人が人を思う気持ち）のキーワードのもと、世界各地の社会貢献活動に従事している社員から「Champions of Care」として選抜した36名をブラジルに派遣し、現地のNGOと交流するプログラムを実施しました。日本から参加したうちの一人ビジョンケア カンパニーの田中英三郎は、これまで東日本大震災の復興支援のため、福島県南相馬市のボランティアリーダーとして、がれき撤去などに従事していました。

ブラジルで育まれた、未来を紡ぐエネルギー

震災発生から3年、福島では長引く避難生活のために、震災関連死が直接死を上回ったと発表されました。こうした現状を世界の人に知ってもらいたいと、この企画に応募したという田中に、リオデジャネイロに集まった世界各国のチャンピオンからは、思いやる気持ちにあふれたさまざまな言葉がかけられました。「君の活動は大切だ」「日本に行ったら、ぜひ参加させてほしい」と言ってくれる人、「本当に大変なことが起きたんだね」と涙してくれる人もいたといいます。世界中を魅了した2014 FIFAワールドカップ™ブラジル大会。大会が放つパワーは、サッカーの楽しみだけではなく、地域社会の未来のために何ができるのか、人々に新たな思いを育むきっかけとなったようです。

©Johnson & Johnson K K.2015

グループ各社代表によるあいさつ

グループ一丸となって、社員一人ひとりが社会と向き合う。

ジョンソン・エンド・ジョンソンはよき企業市民として、よりよい社会をつくるために貢献することを責務としています。大切なのは企業としてだけでなく、ジョンソン・エンド・ジョンソンで働く社員一人ひとりが社会と向き合い、より積極的な活動を行っていくことだと考えています。「我が信条（Our Credo）」にもとづくこうした姿勢は、これまでも、そしてこれからも時代を超えて受け継がれていきます。

お客様のくらしに最も近く、寄り添う存在として

ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
コンシューマー カンパニー
代表取締役プレジデント
マリオ・スタイン

私たちコンシューマー カンパニーは、皆さんのくらしをより健康的で生き生きしたものにするため、さまざまな製品やサービスを提供しており、そのビジネスは地域社会の成長や発展とともに成り立っているといって過言ではありません。そのため、「我が信条（Our Credo）」に記載されている「地域社会への貢献」は、よき企業市民として果たさなければならない重要な活動のひとつと捉えています。技術の発展やライフスタイルの変化にともない、社会で抱える問題は複雑なものになっています。だからこそ、企業、そしてそこで働く社員一人ひとりが地域のために何ができるかを考え具体的なアクションを起こすことがますます重要になるのです。地域とともに成長していくことで、より健やかな、そしてより幸せな社会の実現にむけて貢献してまいります。

ジョンソン・エンド・ジョンソン（株） コンシューマー カンパニー

救急絆創膏などのウーンドケア用品、ベビー用品、スキンケア用品、歯ブラシやマウスウォッシュなどのオーラルケア用品、目薬などのOTC医薬品など、日々の暮らしに欠かせない消費者向け健康関連製品を幅広く提供しています。

一人ひとりが社会とのつながりの窓口

ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）
メディカル カンパニー
代表取締役プレジデント
日色　保

「我が信条（Our Credo）」の特徴は、ジョンソン・エンド・ジョンソンの事業活動に直接関わる事柄や対象についての責任だけでなく、私たちがくらす地域社会への責任について独立して言及していることです。ここでは、会社は社会の公器であると明確に示されていますが、会社は一人ひとりの社員の集合体ですから、全社員が社会貢献活動の体現者でなければなりません。会社として、社会と良好なつながりを持ち続けることに力を注ぐと同時に、社員の一人ひとりが社会のさまざまな課題に関心を持ち、地域の人々の立場で物事を熟考し、よき市民としてあるべき姿を自分なりに認識し、実践していくことが必要だと考えています。奉仕の精神が培われることにより、社会の枠組みの中で、会社やビジネスが果たすべき役割を考える力も養われますし、ヘルスケアの分野で事業を展開するジョンソン・エンド・ジョンソンにとって、仕事への責任感と誇りを高めることにもつながるでしょう。

ジョンソン・エンド・ジョンソン（株） メディカル カンパニー

外科、内科をはじめ幅広い診療領域で最新の医療機器・関連製品の輸入・製造販売を行っています。医療の専門家のパートナーとして、ワールドワイドに広がるJ&Jグループの製品を提供しています。

社会貢献活動が成長のきっかけになる

ジョンソン・エンド・ジョンソン（株）
ビジョンケア カンパニー
代表取締役プレジデント
デイビット・R・スミス

ジョンソン・エンド・ジョンソンは、社会全体に対してよき市民、責任ある市民でありたいという姿勢を示しています。社会貢献活動は、その姿勢を具体化したものです。私たちは資金的な支援だけなく、社員の自主的な活動を奨励し、社会に貢献できるよう環境を整えています。社員こそが社会を変える力を持っていると考えるからです。社会貢献活動に参加すると、人は満足を得るのみならず、喜びや新しい気づきも同時に得ることができます。ビジョンケア カンパニーでは目の健康の観点から、アイバンク、日本盲導犬協会の活動への支援をしている他、南相馬での復興支援の活動に私自身も社員と参加しました。私たちが日々生活し、働いている地域の人々の生活をよりよいものに変えていく、そういった活動を会社全体で支援する姿勢をこれからも大切にしていきます。

ジョンソン・エンド・ジョンソン（株） ビジョンケア カンパニー

1991年に日本で初めての使い捨てコンタクトレンズアキュビュー®を発売して以来、毎日新しいレンズに取りかえる1日使い捨てタイプのワンデー アキュビュー®やシリコーンハイドロゲル素材の1日使い捨てレンズワンデー アキュビュー® トゥルーアイ®のような革新的な製品を開発、提供してきました。

共に成長し、感動できる社会貢献活動を

ヤンセンファーマ（株）
代表取締役社長
ブルース・グッドウィン

企業は、社会や地域と一体になってこそ成長することができます。「我が信条（Our Credo）」のもと、ジョンソン・エンド・ジョンソンは長年にわたって、「地域社会の一員」として社会とのコミュニケーションを図り、患者さま・お客さまを第一に何ができるかを常に考え、企業としての成長を続けてきました。私たちは、社会とのコミュニケーションが資金的な援助だけで実現できるものではないことを知っています。社員一人ひとりが、一市民として自主的に地域社会の人々とともに活動し、感動すること、新しい気づきを得ること、そしてその活動を継続することが、社会との共生、そして持続可能な発展を支える社会貢献活動であると考えます。常に自分が社会の一員であることを忘れず、社会とともに成長する活動を、これからも応援していきます。

ヤンセンファーマ（株）

ジョンソン・エンド・ジョンソングループの医薬品部門であるヤンセン。日本の医薬品事業を担うヤンセンファーマ（株）は独自の開発部門を持ち、がん、免疫疾患、精神・神経疾患、感染症などの治療領域で画期的な医薬品をお届けしています。

©Johnson & Johnson K K.2015